HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	近世ドイツ語圏におけるパンフレットについて
Author(s)	江口, 豊
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 29, 103-120
Issue Date	2019-10-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75957
Type	departmental bulletin paper
File Information	103-120-07_Eguchi.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

jimcts

近世ドイツ語圏におけるパンフレットについて

メディア・コミュニケーション研究院教授
江口　豊

On the German Pamphlets in the 16th and 17th Century

EGUCHI Yutaka

abstract

The pamphlet is one type of printed material other than books, as well as a printed act of persuasion. Newspapers remained till the 1680s as an information tool, i.e. they informed society about different events in the world but did not comment on them. But a society basically needs opportunities or channels to express its own judgments and assessments, especially of important objects. Further, we usually try to share these through personal and/or public communication. In this way, the pamphlet developed in the German society of the 16th century as a printed medium of persuasion. The distinguishable functions of newspapers and pamphlets four centuries ago resembles the distribution of various types of speech acts categorized by linguistic pragmatics. We always do various communicative acts with a text.

0 序

活字で印刷された新聞がニュースを報じるようになってもしばらくの間、いわば単なる事実報道が中心であって、事件や出来事に関するコメントや意見などが本格的に記述されるのは17世紀末のRelation aus dem Parnassoという新聞の登場を待たねばならないという指摘がある[1]。これについては別の機会に論じることとして、新聞成立の前後に存在した他の印刷物で議論や主張を論じるものがなかったわけではない。その最たるものがパンフレットである。後述する通り、16世紀の宗教改革などがきっかけとなり、印刷されたパンフレットを手段とした公的な論争が展開された。こうしたパンフレットなどを手段とする公的論争はその後の三十年戦争などを含め後々も展開される。

小論では、17世紀を通じてほぼ報道に徹していた、あるいは徹さざるをえなかった新聞がその後主張などを取り込む背景に着目したい。そうした歴史的展開の素地とも考えられる同時代に存続した活字媒体としてのパンフレットに着目する。Schwitalla（1999）などのパンフレットに関する先行研究を辿りながら、その概要を確認し、社会全体の公共コミュニケーションが形作られる状況について検討してみる。

1 パンフレットの定義を巡る議論

狩猟採集経済社会で原始的な共同生活を営む時代はいざ知らず、日常的に筆記に使用可能な紙も、印刷術も存在しなかったローマ帝国でも、歴史書の伝承によれば社会的な論争は存在した。当然その場合、元老院での議論のように口頭コミュニケーションや手紙の形で意見や主張が拡散した。この状況は中世を通じて、15世紀中庸のグーテンベルクによる活版印刷術の発明まで継続した。そこには「政治的に影響力のある人々というサークルを超えて体系的に拡散しようという意思が欠けていた」ため、パンフレットは存在しえなかった（Schwitalla同上，47）。グーテンベルクは42行聖書の印刷という大事業を主たる目的として印刷術を実際に活用するのであるが、その傍らにも贖宥状を印刷し、また『トルコ人暦（Türkenkalender）』（1455年）という印刷物も制作している。この反オスマントルコを主題にしたパンフレットについては後述する。いずれにせよ、パンフレットには間違いなく公共性という拡散への意図が条件づけられていると言えよう。

Schwitalla（1999）は、複数のパンフレットに関する定義を論じている。「パンフレットとは、一枚以上からなる、独立した、非定期的で、製本されていない印刷物であり、それが世論全般を対象に扇動（すなわち行動への影響行

►1 Weber（1993）参照。

江口 豊 EGUCHI Yutaka

使）と、あるいは宣伝活動（すなわち信念への影響行使）に向けたもの」というKöhler（1976，50）の定義について、Schwitallaは「社会の公的で論争の対象となっている主題という基準、大量の拡散という量的な基準」を加えることで、「パンフレットという語で意図される事物の大部分を捉えられるだろう」と主張する（Schwitalla同上，5）。ただし、Körber（2001，1）は、三十年戦争期のパンフレットを分析するためには、「扇動（Agitation）や宣伝（Propaganda）という概念は、論証（Argumentation）」という概念と厳密には切り離せないであろう」と主張している。

社会的現象の定義が複数の要素から構成される場合、当然ながら例外や境界現象がみられるのが常である。パンフレットの場合も例外ではない。Schwitallaも定義に含まれる要素に関する問題点も整理している。例えば、「一枚で構成されていないこと」については、文字通り「一枚刷り（Einblattdruck）」とも呼ばれるチラシの内容が版形のより小さな複数枚数に変更したケースがある。裏返せば、複数枚で構成していることが100％パンフレットとはならない。「非定期性」は、新聞や雑誌の条件でありパンフレットには求められないものとされるが、「パンフレットの著者（集団）にはほとんど規則的な間隔で発行させていた」ケースもある。これは定期性に意図性を含めるか否かで区別できるのかもしれない。「製本されていないこと」はパンフレットを本と峻別する点とされる。本は「繰り返し読むために製本されている」のに対して、「パンフレットは最新の事情をきっかけに書かれ、製本されないが、ときには複数のパンフレットが装丁を施され製本されること」もあった。それは「将来に保存するため」だったと15世紀、16世紀に修道院長を務めたPirckheimerという人物の記載にも表れている。「速報性を求めていないこと」はやはり新聞のような報道メディアとの区別の基準と考えられる。しかし、パンフレット自体も最新の事情について論じることがふつうであり、最新の出来事などについて報じることが目的ではなく、「そうしたテーマについて世論を喚起することを目的としている」（Schwitalla同上，5f.）。

「扇動とプロパガンダ」は、パンフレットの主要な目的と考えられている。ただし、ドイツ以外のパンフレット研究者からは、Wilhelm（1996，45ff.）のようにテクスト種としての「扇動、宣伝」と「情報伝達」との間に線引きが困難だという指摘もある。「オーディエンスの非限定性」は基本的にSchwitallaも了承している要素であるが、ラテン語のパンフレットはそれを満たさない（Schwitalla同上，5f.）。この点についても、三十年戦争期のパンフレットの「書き手が前提となる教育に関してかなり等質的な社会層に属し」、「オーディエンス層も宗教改革期の民衆言語で著された印刷物のそれよりも社会的にも教育程度の点でも一様だった」ことから「宮廷教養層に限られた世論の自己理解の手段」であり、「部分的にしかプロパガンダ手段と呼べない」という指摘を行っている（Körber同上，1）。

Schwitallaは主題上の基準も問題にして、「社会の公論上の、議論の分かれる諸問題」という点を指摘し、印刷物としてのパンフレットの「拡散の広範さ」も基準として考えている。結局、当該の「テクストがパンフレットに当たるか否かは、現状の政治社会的情勢を変えようとするのか、維持しようとする

のかという機能が最も重要に思われる」と述べている（Schwitalla同上，5f.）。

2 パンフレットの外形的特徴

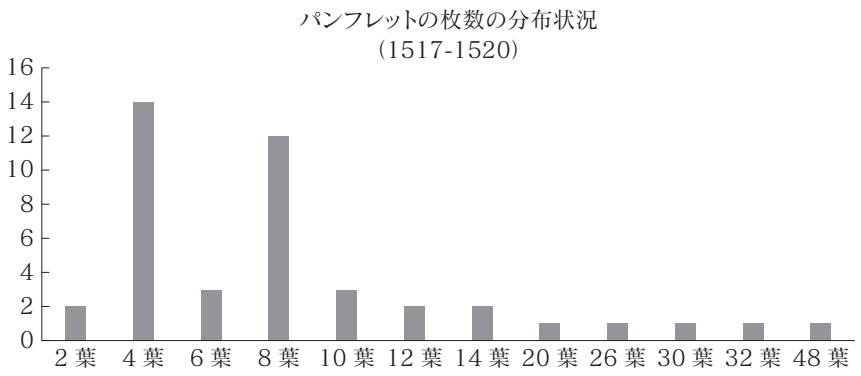
2.1. パンフレットの長さ

パンフレットは基本的に四つ折り版（およそ42×34cm大）で作成された。「活字についても他の印刷物との違いはなく、通常の活字はドイツ文字（Fraktur）のヴァリエーション（シュヴァーバッハー体活字）で、目立たせる書体（例えばラテン語）にはアンチック体（Antiqua）だった」とされる（Schwitalla同上，8）。

パンフレットはチラシ同様「日常的印刷物」（江口2018，112）などと呼ばれるもので、「素早く制作され、安価な値段で売られる目的があった」ために、「低劣な紙が使われ」、「校正も省かれる」ことすらあった（Schwitalla同上）。

ページ数についてSchwitalla（同上）はルターのパンフレットを例に示している。それによると1517年から1520年の期間に刊行された62種類のルターのパンフレットに関しては以下のようなページ数の分布が確認されている。

■グラフ1　Schwitalla（1999，8）の記述をグラフにまとめたもの



グラフ1でも確認できるが、パンフレットの「半分以上が8葉（最大16ページ）未満であり」、パンフレットを実際に読むための「購読時間はおよそ説教1回分（30分から1時間）」とされる（Schwitalla同上，8）。

現在フランクフルト大学図書館にあるGustav Freitagコレクション所蔵の政治パンフレット81種類（1631年制作）でも「三分の一は4葉8ページ以下であり、8葉16ページ以下が半数を占め、14葉28ページ以下に広げると全体の四分の三を成している」とされる。勿論逆に長いものも存在しており、「報告的色彩の強いものでは60葉、80葉というものや、中には158葉を擁するものもある」（Schwitalla同上，8）。

2.2. テクストとイラストの構成

チラシでは文字情報以外にも図像が重要な手段として活用されていた。図像を提供するための手段に関しては、木版画が14世紀に始まり、15世紀には銅版画が利用され始めたことが分かっている。パンフレットの場合、イラストなどの図像が利用されるのは冒頭のページであることが多い。「宗教改革初期のおよそ3100種類のパンフレットの調査によれば、17%弱がタイトルに木版画をあしらっていて、その大部分がテクストの内容に関連するものだ」とされている（Schwitalla同上，10）。タイトルページのイラストは「人目を引き付けることと購買を促すことに役立つ」ためのものである（Schwitalla同上，12）。

しかし、冒頭のタイトルページ以外にもイラストを多用するケースも確認されている。「その一部は絵本のような体裁になっている」ほどである（Schwitalla同上，10）。Schwitallaは例として、48葉で45のイラストを備えたJohannes LichtenbergerのPrognosticatio（1488年）、14葉で13のイラストを持ったJoseph GrünpeckのSpiegel der Sehungen（1508年）、20葉で36のイラストが掲載されたVirdung von HaßfurtのAuslegung der wunderbarlichen Zeichen（1520年）などを挙げている（Schwitalla同上，11）。

2.3. パンフレットのテクスト内容の特徴

Schwitallaはパンフレットの「言語形式、文芸上のジャンル、テクスト種」という章を設けて、その言語上の特性「分かりやすさ、官庁文体、学者ラテン語とドイツ語の対比、具象性、旗幟象徴語[2]、烙印語、言語上の機能、テクスト形式（＝テクスト種）」について論じている（Schwitalla同上，35ff.）。

分かりやすさについては、「朗読しやすく、それにとどまらずリズムよく読めるようにイントネーションが分節されている」、「母韻」を踏む、単純な統語構造など話し言葉を想定した特徴が挙げられている（Schwitalla同上，35f.）。「単純な統語構造の対極にあるのが官庁語であり、18世紀末まで公的文書の文体に影響を持ち続けたが、その特徴は大変長い、幾重にも組み込まれた複合文、名詞、動詞、形容詞の羅列、長いリスト、専門的な法律テクストである」（Schwitalla同上，37）。こうした官庁語の特徴を著した例として、Johannes PfefferkornのJudenspiegel（1507年）というパンフレットには、統語構造上の切れ目もないまま一つの文が240語からできている場合が確認される（Schwitalla同上，37）。学者ラテン語とドイツ語の対比が鮮明に表れた例として以下の点が紹介されている。頑迷にラテン語に固執して、ドイツ語で宗教について論じることを「冒涜」とすら感じていた旧教陣営とは逆に、「宗教改革者たちはドイツ語のパンフレットで学者層よりも広範なオーディエンスに到達できることをよく分かっていた」。「エラスムス、ルター、フッテンがドイツ語で書いた」理由は「本当の真実を民衆にドイツ語でもたらし。羊の衣まとった偽の預言者について誰にでも警告するためだ」というEberlin von Günzburgの記述もある（Schwitalla同上，39）。「具象的な叙述形式は数多くの換喩、隠喩、アレゴリーを含」んでいる。例えば、「絶対主義的な不正

►2 旗幟象徴語（Fahnenwort）とは、文字通り旗印となるような象徴性の高い表現で、とくに政治的な闘争などの状況で、話し手側の人々が糾合できるようなものと推定される。これが肯定的に集団を象徴する機能を持つのに対して、烙印語（Stigmawort）は、とくに敵対する他者集団に対して否定的な象徴表現と理解される。

義に反対するパンフレットは多くの告発的なメタファーを含んでおり、その一つに、『汗』」という表現があるが、この（民衆の汗こそが）侯爵たちを養っている」という言い方に使われている（Schwitalla同上，40）。

「パンフレットの著者たちは、パンフレットのなかに自らのイデオロギー上のスローガンを散りばめている。このスローガンは、自分の立場にとっては旗幟象徴語（Fahnenwort）となり、イデオロギー上の対立陣営に対する烙印語（Stigmawort）と区別できる」（Schwitalla同上, 41）。宗教改革が始まった「16世紀初めの反教皇的、社会批判的パンフレットには「一般の利益」対「自己利益」、「一般の人」対「追従者」などの対比が見られる。他にも、旗幟象徴語には「信仰」、「慈悲」、「神の言葉」、「福音」などがあり、逆に烙印語の例としては、「所業」、「法」、「反キリスト者」、「夢想者」、「反乱」などがあるとされている（Schwitalla同上，41）。こうした二つの語彙の使い分けは、ルター派とトーマス・ミュンツァーに代表される急進派との間でも措定でき、ルター派から急進派に向けた「首領」、「異教徒」、「偽預言者」、「異端派」、「悪魔」などという言葉が烙印語の例とされている（Schwitalla同上，41）。

2.4. パンフレットのテクスト機能とテクスト形式（ジャンル）

「パンフレットの言語機能」という概念で挙げられているのは「弊害に関する啓蒙、告発、要求、訴え、自らの立場の根拠提示と対立者への反駁、公布や法や条約による社会的規範の規制」である（Schwitalla同上，42）。これはパンフレットのテクストに含まれる言語要素を捉えたものではなく、個別のパンフレットというひとまとまりのテクスト全体に込められた「コミュニケーション上の目的」、いわば語用論的機能と考えるべきものであろう。個別のパンフレットが一つの語用論上の機能（発話行為理論でいう発語内行為といえるかもしれない）[3]を果たすと、それに反論するパンフレットが発行される。これによりいわば対話が成立することになることも注意する必要がある。なぜなら、この対話の経過のなかで、例えば「論争が長く続けば続くほど、対立が、皮肉や風刺を伴った、感情的な攻撃に転化」し、「私的、個人的なことがらが表に持ち出され、議論に取って代わられる」からだと指摘されている（Schwitalla同上，42f.）。

パンフレットのテクスト形式として問題になるのは、まず書簡である。ルターの『95ヶ条の論題』に代表される通り、公開書簡のテクスト形式をとったパンフレットは多い。「対立する側や個人を攻撃するために、仮想の書簡が公開される」ことも少なくない（Schwitalla同上，44）。また、「宗教改革の最も重要なテクスト形式として説教」もあり、他に対話、講話、預言もパンフレットに利用されるテクスト形式だった（Schwitalla同上，44f.）。また、著名なテクスト形式（主の祈り、信仰告白、古典テクストなど）がパロディーの基盤として利用されることもあった。

►3　発話行為理論についてはAustin（1955）、Searl（1969）を参照。

江口 豊 EGUCHI Yutaka

3 パンフレットの制作

印刷物であるパンフレット制作に携わるのは、主として印刷人、テクストを著作する人、イラストが必要となればそれを制作する画家・版画家に相当する者、場合によってはそれらを統括する役割を担う者が登場する。そのうち印刷人と著者を取り上げてみる。

3.1. 著者

パンフレットを構成するテクストの著者は、文章が書けることが前提であることから「教養がある（gebildet）」インテリが多い。「インテリとは、ラテン語ができ、たいてい大学での修学経験があることを意味している」。その代表格が聖職者（牧師、司祭、説教者、修道僧、神学教授）であるが、これは宗教改革期にパンフレットが多数刊行されたことも関係するのは当然であろう。SchwitallaはArnold（1990，43f.）[4]を引用していて、それによれば、1524年に刊行された368タイトルのうち、「少なくとも171タイトル（69.2%）が聖職者によるもの、48タイトル（19.4%）は一般人によって書かれたが、その中には、騎士階級、貴族、都市参事、高位貴族、教師、書記」が含まれる（Schwitalla同上，15）。著者の職業分布という点では、16世紀半ば以降パンフレットのテーマが政治的対立に推移していったことに伴い、ますます法律家のパンフレットが増えていった（Schwitalla同上，21）。

Schwitallaはパンフレットの著者として、「福音と教会を巡る議論に初めて女性と職人が加わった」ことを指摘している。職人としては画家、靴職人、書籍印刷人、毛皮職人、職工、パン職人、皮なめし工、野菜農民、歩兵、郡長、音楽家が挙げられている。女性は中等教育機関である「ラテン語学校」や高等教育機関の「大学から締め出されていた」が、「全部で9名の女性が宗教改革賛同のパンフレットを執筆した。このうち6名は修道女で、2名は貴族に連なる者であった」（Schwitalla同上，17）。いずれにせよ、「これほど多くの女性が一度に社会政治的なテーマに関してパンフレットを記述したことは、このときだけだった」とされる（Schwitalla同上，20）。

著者が確認されたケースには上記のような記述ができる一方で、「追求を避けるために多くのパンフレットが匿名のままで印刷されていた」ことも分かっている（Schwitalla同上，22）。印刷物に印刷人、著者、印刷地を明記することが求められていたにも関わらず、「16世紀前半では、印刷人や印刷地を挙げていたのは三分の一未満だった」ほどである（Schwitalla同上，25）。さらには、三十年戦争期のパンフレットに関しては、「どれほど頻繁にパンフレットの著者たちが仮面をかぶって語っているか、つまり他人と偽っていた」かを指摘しているが。これは対立する側の読者にアプローチする手段にしていた（Körber 2001，18f.）。

著者について、パンフレットのもたらした変化も指摘されている。それは「著

►4 Arnold, M. (1990) Handwerker als theologische Schriftsteller. Studien zu Flugschriften der Frühen Reformation (1523-1525). Göttingen.

者の立場・地位」に関する新たな状況であるが、「パンフレットを著すことで同時代の人々に初めて世間に（書き手とその）横顔が知られるようになった」ことである。また「著者もそれ以前にはほとんど切迫したものではなかったが、読者に照準を合わせる、読者に適応すること、読者にとって分かりやすいものとするという課題に直面することとなった」（Moeller 1983，243）。

3.2. 印刷人

現代の書籍や印刷物では考えられないことではあるが、「16世紀の印刷人は売り上げに関心を持ち、そのためにテクストを（独断で）分かりやすいものにし」てしまうこともあった。「彼らはあまりに強い方言使いをならして、印刷地では理解されない語を地域全体で一般的なものに置き換えた」のである。また「縮約語を解消して句読点を多用し、読みやすく、朗読しやすくした」りした結果、「統一的な正書法の傾向をしめす」こととなった（Schwitalla, 同上, 25）。中には、売り上げを増すために、「買って、読め。気に入るだろう」などという勝手な追記を記す者もいた（Schwitalla同上）。

新聞についても同様のことが指摘されたが（江口2014b）、「印刷人にとって小規模な宗教改革に関するパンフレットはよい商売だった。短いテクストは膨大な活字の蓄えを必要としなかったので多くの町の印刷人がパンフレットやほかの日常的な印刷物で生活の糧を稼ぐことができた」。「彼らは制作者であると同時に売り手でもあり」、場合によっては「すでに刊行されたパンフレットを海賊版で印刷することもあった」ようである（Schwitalla同上）。

4 印刷術発明の時期から17世紀前半の主要なパンフレットの事例

Schwitallaは論争を巻き起こしたパンフレットの代表例をいくつか紹介している（Schwitalla同上，49ff.）。そのうち新聞成立前後のパンフレットから、政治、社会的な事件に関係するもの、宗教改革絡みのもの、日常社会的な事件としての魔女狩りに関わるもの、戦争（三十年戦争）にかかわるものを代表例として取り上げ、紹介したい。こうした例を概観すると、パンフレットのテーマの多様性が確認できる。

4.1.『トルコ人暦（Türkenkalender）』（1455年）

『トルコ人暦（Türkenkalender）』（1455年）という最初期の印刷物は暦つまりカレンダーというタイトルが示すような気象・天空事象に関わる情報伝達を目的としたものではない。Giesecke（1991，256）やFüssel（2004）もすでに指摘し、「トルコ人に関する基督教世界に対する警告」と題目がつけられているように、（6葉の紙に）印刷された最初の政治的なパンフレットである。1453年5月のオスマントルコによるコンスタンティノープル攻略により、ヨーロッパが異教徒の侵略に直面するという危機に、キリスト教世界が一致して

十字軍参加（1456年5月1日に開始と指定されていた）で対処するよう呼びかける内容となっている。カレンダーを連想させる形式としては、呼びかけの対象を「全能の神」から始めて、1月は教皇に、2月は神聖ローマ皇帝へ、3月はバルカンの支配者たちに向け、というように月ごとに続く点である。この「宛先のリストで全体の三分の二を占めている」（Giesecke同上，257）。このパンフレットは、1455年6月29日に布告された教皇CalixtusⅢ世の大勅書（後に25ページにわたり印刷もされた）との組み合わせで初めてテクストの構成が理解されると指摘されている（Giesecke同上）[5]。Schwitallaは、「15世紀後半に手書きと印刷の両方でパンフレットというメディア形式が併存していた」と指摘している（Schwitalla同上，48）。

►5 Gieseckeは、当時の教皇庁から一般信徒に至る情報流通のメカニズムに果たした印刷術の革新性を「同時性」と「直接性」という概念で説明している。それまでの手書きの文書の段階的な流通と比較して、印刷された情報は発信者（この場合教皇）から受信者（末端の神父や信徒）まで、直接、大きな時間差もなく到達したこと、そしてこのパンフレットがその試みであったことを指摘している（Giesecke 1991, 260ff.）。

4.2. Reuchlin - Pfefferkorn論争及び反ユダヤ人パンフレット

「ユダヤ人はタルムード（ユダヤ教の教典）を維持することが許されるのか」という問いに関して、「1507年から1509年まで基督教に改宗したユダヤ人のJohannes Pfefferkornが4種のパンフレットを…ドイツ語で…執筆」し、それに対して「1505年にJohannes Reuchlinが『何故ユダヤ人はかくも長きにわたって困窮にあるのかについてのドイツ語の回状』を公刊した」（Schwitalla同上，49）。Pfefferkornが「ユダヤ人をキリスト教に改宗させようと、……子供達に強制的な洗礼を授けるべきとか、貸し金業を禁じるべきだとか、そうしたことを拒むのであれば追放すべきだ」とまで主張した（Schwitalla同上，49）。これに対して「フランクフルトのユダヤ人たちの異義申し立ての後、四つの大学と著名な法学者でヘブライ学者のJohannes Reuchlinに専門家の意見書が求められた」。「1511年パンフレット『Augenspiegel』で公開されるが、Reuchlinの意見書は、16世紀にしては政治的に寛容で、法律的にもリベラル、知的にも開かれた態度を示す珍しい証である」（Schwitalla同上，49）。「Reuchlinの『Augenspiegel』は、複数回にわたり禁止され、公的に追放された最初のパンフレットとなった」。また、「両者の二つのパンフレットにより、ドイツ語での最初の大規模なパンフレット論争が生じた」。論争自体について言えば、「後続するパンフレットの中で事実関係に関する問いが背景に押しやられ、個人を中傷する論争が中心事となってしまう」し、「司教教会、カトリックの諸教団、皇帝、都市、大学、神学者や人文学者」など論争の及ぶ範囲が拡大していった（Schwitalla同上，50）。因みにルターはユダヤ人問題に関してはるかに過激だった事は良く知られるところであるが、彼のパンフレット『ユダヤ人とその嘘』（1543年）では「ユダヤ人の家々やジナゴーグを破壊せよと呼びかけている」ほどである（Schwitalla同上，52）。

4.3. ウルリヒ・フォン・フッテン

「ヴュルテンベルク公ウルリヒは1515年5月臣下の主馬頭Hans von Huttenを、その妻を我が物にせんがために森の中で自ら殺害する」。これをきっかけに、被害者の家族が公開書簡を著すとともに印刷し、従兄弟である詩人ウルリヒ・フォン・フッテンもパンフレットを著し、臣下団や公の妻とその実家であるバイエルン公からも激しい非難を浴び、最終的に帝国追放に終わった。

この経過の中で、「私的な領域から個々の事実が公に晒され、センセーショナルな価値が生じ、商品としてのパンフレットを売れるものにした」とされる（Schwitalla同上，52ff.）。このパンフレットには宗教的対立が論争の背景にない点が独特であり、いわばセンセーショナリズムの領域に足を踏み入れたパンフレットととらえられるかもしれない。「16世紀後半個別領邦の政府が政治闘争をパンフレットによっても展開し始めた」一つのきっかけという指摘もある（Schwitalla同上，54）。

4.4. 宗教改革と農民戦争（マルティン・ルターと宗教改革者たち）

「パンフレットという印刷媒体がこれほど決定的にドイツ史に影響した時代は宗教改革初期と農民戦争を除いてない」ほどである（Schwitalla同上，54）。実際パンフレットが量的にもこれほど多数作成された時代もないことを統計も示している。「1520年から1526年まで11,000種類以上のパンフレットが1,100万部以上発行された、これは読書人口1人あたり20部以上という値である」（Köhler 1986, 250f.）。とりわけ「1518年のパンフレットの唐突な増加とその1524年まで続く急激な増加」は、Köhlerによる「1510年から1530年までの3,016種の発行数調査」で明らかである（Schwitalla同上，55）。この「パンフレットの爆発（的増加）の冒頭にあるのがルターの手書きによる『95ヶ条の論題』であ」り、「その後3ヶ月でニュルンベルク、ライプツィヒ、バーゼルで3度印刷され、ラテン語の張り紙で壁に張り出された」（Schwitalla同上，56）。これに対して「1518年Johann TetzelとKonrad Wimpinaがラテン語での反論を公刊し、それに対してルターが同年3月に『贖宥と恩寵に関する説教』で答える」というように論争が継続していき、「一年半の間に少なくとも12のパンフレットとチラシ（一枚刷り）が生じる」事態となった（Schwitalla同上，56）。「ルターは生涯で200種以上のパンフレットの文章を執筆した」が、「1530年までだけでもKöhlerのパンフレット目録で903種の印刷物が確認されている」（Schwitalla同上，56）。Schwitallaは、ルターが対話を除けば説教、書簡、チラシ、様々な詩などというようなテクスト形式を多様に使い分けていた点と、分かりやすさ、具体性、機知に富んだ表現テクニックという点が人気を博した理由だと指摘している（Schwitalla同上，57）。

ルターのパンフレットの影響によって、トーマス・ミュンツァーなどの急進的な改革志向の神学者や聖職者などがパンフレットを執筆したことも見逃せない点であろう（Schwitalla同上，58）。これに対してカトリック教会側に立つ聖職者たちは、パンフレットをドイツ語で書かなかったこと、ラテン語で書いても読める人は少なく、また、印刷してくれる印刷職人を見つけるのにさえ困難を感じるという対照的な状況があった（Schwitalla同上，61f.）。

4.5. 魔女に関するパンフレット

パンフレットには魔女狩りを扇動するものもあった。Schwitallaはパンフレットの歴史で「もっとも災いに富んだ印刷物」として、1487年から1520年にかけて13刷されたドミニコ会修道士Heinrich InsistorisとJakob Sprengerの『Malleus Maleficarum』を挙げている（Schwitalla同上，70）。このパンフレッ

トは「キリスト教会でのあらゆる女性敵視の発言を寄せ集めたもの」で、「第一部と第二部で魔女の罪業を叙述し、第三部では、密告、拷問、自白、死罪、財産没収までの異端審判の手引きの諸段階を示す」という三部構成となっている。「魔女狩りを呼びかけるパンフレットの多数は、組織内で書かれたテクストで、最初ラテン語で書かれ、その後初めて部分的にドイツ語に翻訳された」とされる（Schwitalla同上，70）。

「都市住民や郡部住民にとって魔女に対する狂気は説教とチラシ（一枚刷り）で拡散した」が、「1500年から1570年にかけて平均して10年に一度か二度しか魔女文書は発行されなかったのに対して、1580年から1600年までの20年間で少なくとも16種の」多数が、しかもドイツ語で発行された。その一つにトリアの補佐司教Petrus Binsfeldがラテン語（1589年）とドイツ語（1590年、1591年）で刊行したパンフレットがあり、「魔女裁判を急激に増加させた」と言われている。その結果、「トリア周辺の教区だけで1587年から1593年にかけて368名が処刑された」。「狂信的な魔女狩りのパンフレットと比較して、魔女裁判の反対者のパンフレットの数はわずかだった（Schwitalla同上，72）。

4.6. 三十年戦争

それ以前の政治的パンフレットにも該当すると考えられるが、三十年戦争に関するパンフレットで特徴的なのは、「統治者の委託を受けた法律家が執筆することが増えた」点である。「パンフレットのきっかけとなったのは、……決定的な軍事的、政治的状況であった」。そのために、例えば「ティリー将軍による1631年5月のマクデブルク攻略（と大規模な略奪、暴行）がドイツ中でセンセーションを引き起こし、300点以上のパンフレットをもたらした」り、重要な戦いも多数のパンフレット刊行につながった（Schwitalla同上，75）。

そもそも宗派対立が大きな原因だったものの、政治的な対立構図へと変質した三十年戦争を象徴するように、「いかに17世紀の諸政府はパンフレットをヨーロッパ全般に自らの政策説明に利用」したかを示すのが、スウェーデン軍のシュトラールズント上陸後に刊行されたJohan Adler Salviusのパンフレットである。これは「23回印刷されたが、ラテン語で5回、ドイツ語で14回、オランダ語で2回、英語とフランス語でそれぞれ1回印刷された」。こうしてパンフレットの内容も「政治的、法律的で、もはや宗派的な議論ではなくなった」（Schwitalla同上，73）。

この時期のパンフレットに関しては、Körber（2001，29f.）もラテン語の知識やドイツ語の複雑な文章を根拠にして主張するように、ターゲットとしてのオーディエンスが限定されたものが多くなったこと、テクストの最終部に韻律を備えた詩が増えたことが傾向として指摘されている（Schwitalla同上，76）。また、それまでなかったような「公論への影響行使のために、体系的に操作された情報宣伝」も特徴として指摘されている（Schwitalla同上，76）。

5 パンフレットの受容プロセス

5.1. 社会全体でのパンフレット受容の略図

パンフレットが宗教改革期にどのように受容されたのかに関しては、複数の研究者が共有する点がある。Schwitallaも「宗教改革期のパンフレットが個別に黙読された、個人やグループに向けて音読された、(読まれたパンフレットの内容が) 書きとられた」としている (Schwitalla同上, 27)。「宗教改革期のパンフレットが音読されたことを示しているのがパンフレット自体の中の要求であった」とし、その例として「読むか読むのを聴く (lesen oder lesen hören)」という表現が織り込まれたパンフレットを複数紹介している。その一つに「自分で読めないのなら……貧しい学生を一人頼め、その者が一日分のパンでお前のために読むから」とある (Schwitalla同上, 27)。

Köhler (1986) は、宗教改革期の世論形成についてパンフレットが重要な役割を果たしていることを踏まえつつも、同時に社会全体のコミュニケーションモデルを検討している。「どの受容者にどういう経路でパンフレット内容が到達したのか、どの程度まで受容者の見方、期待、価値感がパンフレットの内容と合致したのか」という問題について、コミュニケーション論の観点に立って、考慮すべきことがらを挙げている。その一つがラザーズフェルドの「コミュニケーションの二段階の流れという仮説であらわされた知見」だという[6]。こうした知見も踏まえると、Scribner (1981) も主張する通り「宗教改革初期ではパンフレットの受容は口頭コミュニケーション、書記コミュニケーション、活字コミュニケーションの間を交代で行き来していた」とまとめることができる。そうした根拠の一つとして、パンフレット著者の一人「Clemens Zieglerが読者に、分からないことがあれば自分のところに来るように求めた」とまで書いている事実が挙げられている (Schwitalla同上, 28)。

►6 江口 (2019, 110) でも同様の指摘をしたが、Köhler (1986) は36年前にすでに同様の議論を展開している。

5.2. パンフレットの販売に関係すること

パンフレットの販売に携わったのは、(1) 印刷人自身、(2) 地方回りの販売人、(3) 郵便馬車や郵便御者、(4) 地方を巡回する商人」などである (Schwitalla, 同上, 33)。

パンフレットは、「広場、宿屋兼食堂、年の市、フランクフルトやライプツィヒの見本市会場」のような場所で販売され、他にも帝国議会や政治、宗教上の大きな催しなどが契機となってその周辺でも売られた。

そもそもパンフレットの発行部数について、「15世紀の最後の四半世紀で約300部だったものが、1520年頃までには約1,000部に増加」したらしい。もちろんルターのパンフレットは例外であり、25回も印刷されたもの、一度に4000部印刷されたものなど驚異的な発行部数となっている。

パンフレットの買い手（読者）と想定されたのはどのような人達であろうか。Schwitallaによれば、「パンフレットがすべての社会層に到達したのは、宗教改革初期と1789年以降の反乱と社会変革期だけだ」という（Schwitalla, 同上, 33）。Ulrich von Huttenのパンフレット『Klageschrift gegen die tyrannische Gewalt des Papstes』（1520年）には、例えば「すべてのあらゆるドイツ民衆、侯爵閣下方、高貴な方々、身分が何であれ都市市民と一般の人々に向けて」という呼びかけ形式が使われていることから、ここに挙げられている人が読者として考えられていることが分かる（Schwitalla, 同上, 33）。その一方で、「一義的な読者」と呼べるような限定された読者を想定したパンフレットも存在する。そうした例として「ある都市から追放された改革派の聖職者がかつての自分の教会員に向けて書いたために、箇所によってはその状況に通じた者だけがテクストを理解できる」ことを挙げているし、「宗派分裂、政治的分裂のなかでは、論争的な性格のパンフレットのターゲットは味方陣営の構成員であることが多かったが、それが味方側の立場のための議論を提示し、敵側を嘲弄し、敵側の失敗を喜ぶことで自陣営の団結を強めることに役立った」とされる（Schwitalla, 同上）。同様に、「一般の人へ」と謳っていても、「テクストのなかのラテン語の一節や多くの外来語からラテン語の素養がある者が一義的な読者だった」というケースもある（Schwitalla, 同上, 34）。

パンフレットの値段について判明していることは多くはない。「1515年から1525年の間では、4葉8ページのもの一部で1プフェニッヒ3ヘラー、6葉12ページのもの一部で2プフェニッヒ、8葉16ページのもの一部で3プフェニッヒ、10葉20ページのもの一部で4プフェニッヒ」とされている（Schwitalla, 同上, 31）。価格が低いのは、低湿な紙を使用できること、基本的に製本する必要はないこと、印刷人や制作者の周辺で短期に売りさばけるもので、購入対象者が比較的広範、すなわち高所得でない階層の人でも購入可能な価格にする必要があったことに起因する。

5.3. パンフレットの監督・取り締まり

ルターの宗教改革に向けた活動のなかで爆発的な増加を迎えたパンフレットではあるが、「1525年にはすでにパンフレット発行の頻度は検閲強化のために再び低下する」（Schwitalla同上, 55）。ではどのような原因で執筆者や印刷人が処罰を受ける事案が生じたのであろうか。Schottenloher（1917）が宗教改革期（1520年代から1530年代中心）のパンフレットに関連した事例をいくつか紹介しているが、そこでは監督する側も、世俗権力者である諸侯、都市参事会のみならず大学の評議会などさまざまであり、処分の内容も比較的温和なものもある一方で有無を言わさぬ峻厳さで死刑を執行するケースすらあったことが分かっている。珍しいケースでは、1523年初頭のルターとAndreas von Karstadtとのミサのしきたりに関する紛争を巡り、ヴィッテンベルク大学の評議会が刊行に反対し、原稿とともに印刷物を廃棄した記録がある（Schottenloher同上, 312f.）。

世俗権力者の訴えでは、カトリック教会に忠実なバイエルンの事例がある。「1519年にミュンヘンの印刷人Hans Schobsserがルターの『キリストの受難省

察の説教』を複製した」時には、「まだローマからの運命を決めるような鶴の一声が下されることはなかった」が、「1521年に『ドイツ国民のキリスト教貴族に与う』を印刷」すると「発行部数すべてが没収、一部も残さず廃棄され」た。これはルターの敵対者Johann Eckの手紙の中の記述でようやく判明している（Schottenloher同上，306）。また、「厳格なカトリックのザクセン公ゲオルクのライプツィヒの印刷人に対する行動」がいくつか伝えられている（Schottenloher同上，307）。「ゲオルクはライプツィヒ市参事会に1521年10月パリ（ソルボンヌ）大学に反対する人文主義者の論争書について苦情を伝えたが、それはゲオルク自身が攻撃されたと感じた」からである。結局、「ライプツィヒ市当局は問題の印刷物を捜索し、何部かを押収した」（Schottenloher同上，308）。

一方、新教と旧教がやはり国を分断する危機を孕んだスイスでも、パンフレットが葛藤を生み出している。かつてのフランシスコ派修道士が、1523年『一般スイス国民への忠告』というパンフレットでカトリック教徒のルツェルンの人々を厳しく攻撃したが、バーゼルの印刷人Adam Petriがルツェルン市参事会の取調べに対して執筆者について供述しないまま、200グルデンの罰金、400部の謝罪状を印刷させられる処分を受けている。執筆者はSebastian Hoffmeisterであるともされるが、一部はすでに販売済みでアウクスブルクで複製も印刷された（Schottenloher同上，309）。さらに、「1526年夏、ストラスブールの説教師Wolfgang Capitoがツヴィングリ宛の手紙を印刷させた」が、「この印刷物をもった使いが捕まり投獄され」、ストラスブールの「Wolf Köpfelの印刷所で制作されたものだと自白した」が、「罰金刑で釈放され」ている（Schottenloher同上，309f.）。

「宗教改革の様々な流派が流れ込んだ都市」ストラスブールでは、「市民秩序に反しない限り、印刷人や書籍商人が自由を謳歌していた」（Schottenloher同上，316）が、「カトリック側は自らの弁護パンフレットを印刷する者も編集人も見つからないと不満を訴える」という状況もあった。ルターの敵対者であるトーマス・ムルナーのパンフレット『ルター派の愚か者たち』を印刷したのがストラスブールの印刷人Johann Grüningerだったが、「ストラスブール市参事会はGrüningerが印刷したムルナーのパンフレットを回収して焼却させ」ている（Schottenloher同上，310）。

15世紀、16世紀の印刷の中心地ニュルンベルクでも当然ながらパンフレットに関する取り締まりのケースが記録されている。「1520年印刷人Friedrich PeypusがSebald Buschのカレンダーを、教皇と聖職者に嘲笑的なイラストを当てて刊行した」が、「バンベルクの司教ゲオルクがこれについて不興を表明すると、1520年11月27日印刷人を入牢させ、厳しい譴責処分として罰した。その一方で著者は懲役2ヶ月となり」、「カレンダーは押収され、廃棄された」。さらに、1527年秋トーマス・ミュンツァーのパンフレットが出回り、それがニュルンベルクの印刷人Johann Hergotによるものと判明する（Schottenloher同上，308）。これに対して、「印刷所を閉鎖し、…4人の職人を収監したが、寛大な措置に転換して四人を釈放し、……押収された400部のパンフレットに対して損害賠償の施しを支払った」とされる（Schottenloher同上，313）。「1527年

江口 豊 EGUCHI Yutaka

1月説教師Wolfgang Vogelのパンフレットがニュルンベルクで出回り、後に印刷人がアウクスブルクのMelchior Rammingenと判明する。Vogelがミュンツァーの支持者で…あらゆる権威を否定…」と認めたために、3日間の取り調べの後死刑に処された（Schottenloher同上，315）。関係者の処刑につながったケースは少ないが、ある種の社会主義的な主張が展開されたという点で符合するものとして、「1527年1月ザクセン地方で『キリスト者の生活の新たな変動、悪魔よ身を守れ、地獄が崩れるぞ』という一風変わったタイトルのパンフレットが出回った。同じ年の1月末に二人の学生が反乱を促がすようなパンフレット販売の廉で逮捕され、時を経ぬうちに、ライプツィヒでJohann Hergotが収監され、短い尋問の後5月20日に死刑となっている（Schottenloher同上，315）。

こうした極端な処罰例は、いずれもトーマス・ミュンツァーに代表される急進的な思想に関係するものと理解できる。ルターと激しく対立し農民戦争で徹底的に弾圧された人々については、例えば「1524年12月5日にアンスバッハという土地の代官宛ての辺境伯Casimirの命令」でも明らかであり、「ミュンツァーなどによるいかなる書物や印刷物も……販売したり、販売を目的に所持したり、与えたりしてはならない」と指示されているとおりである（Schottenloher同上，314）。

さらに監督の対象として目を付けられていたのが、再洗礼派との関連を疑われたパンフレットである。「1527年および1528年再洗礼派がその教えを拡散させると、いたるところで諸侯や都市当局が、運動そのものや懸念される底流の盛り上がりをあらゆる手段を使って堰き止めようと強いていた。……1528年初頭再洗礼派のパンフレット流通を知った皇帝太守のバーデン辺境伯フィリップがストラスブール市当局に印刷人に関する調査を依頼した。……パンフレットはヴォルムスの印刷人Peter Schöfferのかつての植字職人であるCiriacusという名の男により印刷されたと、シュパイアーで捕らえられた共犯者が供述」した。パンフレットの作者は再洗礼派のChristoph Freieslebenで、1000部印刷されたものだった（Schottenloher同上，320）。

この時期のパンフレットでは、自身が新教派であるCalvinが新教派の印刷物の著者を火炙りの刑に追い詰めたケースも起こっている。1531年ストラスブール市庁舎の建物内にあったWendelin Richelの書籍店舗に「三位一体信仰に反駁する」印刷物が並ぶ（著者はMichael Servet、印刷人はHans Setzer）が、ストラスブール市の検閲担当者の目に留まり、押収され、販売禁止となった。さらに1532年Michael Servetが著した別のパンフレットが流通し、カルヴァンの訴えによりServetはジュネーヴで「1553年10月26日に火炙りの刑と」なっている（Schottenloher同上，318f.）。

主張やコメントが中心という性格が強いパンフレットという印刷物は、当然ながら権力者側の主張などと一致する限り問題にならないが、いったんその許容範囲を超えれば、ただちに取り締まりの対象となるのは避けられない。新聞の場合には、例えばニュースソースが駅逓経由であったことを口実にすることもできたがパンフレットではそれができない。したがってチラシ同様パンフレットも著者名、印刷人名などを伏せたままのもの、三十年戦争期の

ように、偽名はおろか、あたかも対立する陣営の人間であるかのように装うケースもあり、ドイツ全土がほぼ戦場となる混乱の中で、「当局は（パンフレットを含む）日常的印刷物の制作や販売をほとんど管理できなかった」という事態にもなった（Körber 2001, 19）。当局者の監督方針に沿わないものが刊行されることになるのは、もちろん人々に求められるものが売れるからであり、体制に忠実な、いわば退屈なものを人は読みたがらないのは世の常だからである。当然ながら制作に関わる者たちもよく売れるものをリスク承知で制作し、経済的利益を求めた面もある。

6 パンフレットと新聞との関連について

メディア規制の厳しい国の報道を引用する際に、ときおり「論評抜きで報道」という言い回しが使われることがある。1605年に刊行が始まった新聞にはこの論評、コメントが基本的に許されなかったし、制作者たちも検閲を恐れて、おいそれとは自らの価値判断を言語化することはなかった。17世紀末に至って、それが変化し始めたといわれているが、現代の新聞との最大の相違点かもしれない。社会の中で価値判断を伴う意見を持たず、あるいはそうした意見を人に伝えることなく過ごせることはむしろ例外であろう。それどころか我々には、おそらく出来事や事物、思考や主張に対する判断や評価をコミュニケーションにより共有しようとする傾向があるともいえる。ただし、その努力はMcQuail（2000，72）が指摘するように、「社会の一致に貢献しているのか、……どちらかといえば傾向として分裂や不安定の方向に影響しているのか」という問いにもつながるものである[7]。そういう意味で、議論、論評を表現する場としてのパンフレットは、メディア史のなかで重要かつ独特な位置を占めているのではないだろうか。

►7 Bonfadelli, H./Jarren, O./Siegert, G. (Hrsg.) (2010) Einführung in die Publizistik-wissenschaft. S. 645f.

パンフレットのこうした機能について、Schwitalla（1999）では「言語的機能」という次元で「弊害についての解説」、「告発」、「要求」、「アピール」、「自身の立場の論拠」、「対立者への反論」などのカテゴリーを立てる一方で、テクスト種（Texsorte）という次元ではWolf（1983）の「報告」、「教訓書」、「要求」、「集団を構成するプログラム」、「空想的な社会イメージ」、「協定」、「契約」、「評価書」、「理論的論文」、「弁論書」、「告発書」、「対決」という分類範疇を列挙している。しかし、これは十分に整理された明確な概念とは言いにくい。一つのテクストでもあるパンフレットで何を達成しようとするのかを検討する場合、言語学の語用論で論じられている発話行為理論に準拠した概念を適用できないであろうか。さまざまなテクスト形式（Textform）が「発語行為」だとすれば、「告発」や「批判」、「要求」などのカテゴリーが「発語内行為」となり、オーディエンスを「説得」することが「発語媒介行為」を成すという発想である。問題は、社会の中の公共コミュニケーションで我々は何種類の発語内行為を遂行しているのか、あるいは何種類の発語内行為が社会コ

ミュニケーションには必要なのかということも問題になるかもしれない。報道は単に事実関係を「伝達」、すなわちオースティン流の「陳述」であるならば、パンフレットという媒体で遂行される発語内行為は一律に「要求」で括られるかもしれない。「要求」の下位分類として、事実関係認定への要求もあれば、事実認定の様態（肯定的であれば「主張」であり、否定的であれば「批判」）もあろう。「要求」であればこそ、背景にある権力者、体制側の暗黙の「要求」との衝突が生じる。ただし、人間には推論という思考操作ができてしまうことから「間接発話行為」として単なる「報道」が「主張」などの「要求」行為に解釈されるというすべてを混交させてしまう危険性もあり、それは権力者の印刷物監督で往々にして検閲の拡大解釈の余地を形成する。いずれにしても、パンフレットという具体的、明示的な表現レベルで「要求」が提示されたことが、現在のジャーナリズム活動の端緒となったことだけは否定できないであろう。

参考文献

江口　豊（2013）「ドイツ語圏活字メディアの歴史について―新聞を中心に―」（研究ノート）　*国際広報メディア・観光学ジャーナル*　17，3-12.

―――（2014a）「ドイツ語圏における新聞の前身形態について」（研究ノート）　*メディア・コミュニケーション研究*　66，59-71.

―――（2014b）「活版印刷術の展開と新聞成立との関連について」（研究ノート）　*メディア・コミュニケーション研究*　66，1-22.

―――（2015）「駅逓制度と新聞成立の関連について」（研究ノート）　*メディア・コミュニケーション研究*　68，57-77.

―――（2018）近世神聖ローマ帝国におけるチラシについて（研究ノート）　*国際広報メディア・観光学ジャーナル*　27，111-128.

―――（2019）新聞成立期における新聞受容の前提について（研究ノート）　*メディア・コミュニケーション研究*　72，96-108.

Austin, J. (1975) *How to Do Things with Words. The William James Lectures delivered at Harvard University in 1955.* Clarendon Press, Oxford.

Bogel, E./Blüm, E. (1971) *Die deutschen Zeitungen des 17. Jahrhunderts*. Schünemann Universitätsverlag, Bremen.

Füssel, S. (2004) *Gutenberg und seine Wirkung*. Insel, Frankfurt a. M.

Giesecke, M. (1991) *Der Buchdruck in der frühen Neuzeit. Eine historische Fallstudie über die Durchsetzung neuer Informations- und Kommunikationstechnologien.* Suhrkamp, Frankfurt a.M..

Köhler, H.-J. (1976) Flugschriften. Versuch der Präzisierung eines geläufigen Begriffs. In: Rabe, H./Molitor, H./Rublack, H.-Ch. (Hrsg) *Festgabe für Ernst Walter Zeeden: Zum 60. Geburtstag am 14. Mai 1976*. Aschendorff. S. 36-61.

Köhler, H.-J. (1981) Fragestellungen und Methoden zur Interpretation frühneuzeitlicher Flugschriften. In: Hans-Joachim Köhler (Hrsg.) *Flugschriften als Massenmedium der Reformationszeit*. S. 1-27.

Köhler, H.-J. (1986) Erste Schritte zu einem Meinungsprofil der frühen Reformationszeit. In: Volker Press/Dieter Stievermann (Hrsg.) *Martin Luther. Probleme seiner Zeit.* S. 244-281.

Köhler, H.-J. (1987a) Die Flugschriften der frühen Neuzeit. Ein Überblick. In: Werner Arnold (Hrsg.) *Die Erfindung der Buch- und Bibliothekgeschichte in Deutschland*. S. 305-345.

Köhler, H.-J. (1987b) „Der Bauer wird witzig “. Der Bauer in den Flugschriften der Reformationszeit. In: Peter Blickle (Hrsg.) *Bauer und Reformation, Bd. 1.,*. S. 187-218.

Körber, E.-B. (2001) Deutschsprachige Flugschriften des Dreißigjährigen Krieges 1618 bis 1629. In: *Jahrbuch für Kommunikationsgeschichte* Vol. 3, S. 1-47.

Moeller, B. (1983) Flugschriften der Reformationszeit. In: *Theologische Realenzyklopädie* Bd. XI, S. 240-246.

Schwitalla, J. (1999) *Flugschrift.* Max Niemyer Verlag, Tübingen.

Scribner, R. W. (1981) Flugblatt und Analphabetentum. Wie kam der gemeine Mann zu reformatorischen Ideen? In: Köhler, H. J. (Hrsg.) *Flugschriften als Massenmedium der Reformationszeit*. Stuttgart, S. 65-76.

Searle, J. R. (1969) *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language.* London: Cambridge University.

Stöber, R. (2005) *Deutsche Pressegeschichte.* UVK, Konstanz.

Weber, J. (1993) Daniel Hartnack — ein gelehrter Streithahn und Avisenschreiber am Ende des 17. Jahrhunderts. Zum Beginn politisch kommentierender Zeitungspresse. In: *Gutenberg-Jahrbuch*. Vol. 68, 140-158.

Wilhelm, R. (1996) *Italienische Flugschriften des Cinquecento (1500-1550).* Max Niemyer, Tübingen.

（2019年4月15日受理、2019年7月23日採択）

江口　豊
EGUCHI Yutaka